

八戸藩の参勤交代について

佐藤 良宣¹⁾・滝本 敦²⁾

The Hachinohe-Nanbu Clan's Mandatory Alternate Residence the Edo Period

SATO Yoshinobu and TAKIMOTO Atsushi

キーワード：八戸藩、交通史、上り街道、参勤交代

1. はじめに

青森県立郷土館歴史分野では、令和3年度の研究紀要で「奥州通道中記」を紹介して以来、参勤交代を中心とした青森県の近世交通史について取り上げてきた。令和5年度は、弘前市立博物館の「参勤道中記」をはじめ、弘前藩に関する道中記の調査のあらましを掲載した。令和6年度は弘前藩日記から、安政5年(1858)の弘前藩主津軽承昭の初入部について記した。本年度は、八戸藩の近世交通史のうち、参勤交代に関する論文等をもとに、その概要をまとめ、今後継続する調査の足掛かりとしたい。

2. 参勤交代で利用する街道と上り街道について

八戸藩は寛文4年(1664)に成立した。盛岡藩第3代藩主の南部重直が嗣子を正式に定める前に没したことから、幕府の裁定により、盛岡8万石と八戸2万石に分けられ、いずれも重直の弟が継ぐことになり、盛岡藩は重信、八戸藩は直房が継いだ⁽¹⁾。それ以来、幕末まで八戸藩の参勤交代は続けられ、藩主は参勤交代の際、上り街道と奥州街道を使っていた⁽²⁾。

「上り街道」とは、別名「登り街道」「八戸街道」とも呼ばれ、八戸城下の南西上組丁にある惣門(八戸市新荒町)を起点とし、市野沢、大森(ここまで青森県八戸市)、観音林(岩手県軽米町晴山)を経て、福岡の北、堀野(現いずれも岩手県二戸市)に至り、江戸へと南下する奥州街道と合流する街道である。上り街道という名称は、八戸藩主が参勤交代の際に江戸との往来で通行するようになったことから名づけられたと考えられるが、正保4年(1647)の「南部領内総絵図」には、街道、及び一里塚がすでに記されており、八戸藩成立以前から開通していたとされる⁽³⁾。

上り街道の整備については次のとおりである。南部領内の街道の整備、一里塚の築造は、慶長9年(1604)～同15年(1610)と考えられている⁽⁴⁾が、慶長年間の八戸地方はまだ根城南部氏の支配下にあったため、藩主のいる盛岡方面へは上り街道とは異なる道筋が整備されたとみられる⁽⁵⁾。

その後、寛永4年(1627)に根城南部家2代直義が遠野に移封され、八戸に城代が置かれるようになると、八戸地方の政治の中心が根城から八戸に移ることとなった。直義の遠野移封後間もないうちに上り街道にあたる道がほぼ同じ経路で整えられ、八戸藩の成立により初代藩主直房が入部したところには、すでに大いに利用されていたと推察される⁽⁶⁾。

3. 上り街道の維持管理について

街道を通過する藩主の参勤(江戸に向かう)・下向(国元の八戸に帰る)などの往来、物資の輸送が盛んになるにつれ、道の維持管理には多くの労力と費用が必要になり、藩の出費もさることながら、街道筋の領民の負担は相当のものとなった。内容的には伝馬役の他、参勤・下向の際の道普請、清掃、洪水の後の橋・道普請などがあつたとされる。

一方、明暦3年(1657)の領内街道整備の実施以降、上り街道にも松並木が植えられ始めたと考えられ、その保存も行われた。松並木の維持のために毎年3月に無断伐採、煙草火の注意が出され、無断で伐採すると罰せられている⁽⁷⁾。ほか、里程を示す一里塚に関わり、各村に一里番と称される物資順送りの際の責任者が配置されていた⁽⁸⁾。

4. 参勤交代の日程

『南郷村史』が引用する「八戸藩日記」によると、宝暦年間の5代藩主信興の下向・参勤について以下のように記されている。下向については、宝暦5年(1755)4月25日に江戸を発駕して5月10日に八戸到着、参勤につい

1) 佐藤良宣 青森県立郷土館 学芸主幹(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

2) 滝本敦 同 主任学芸主査 同

ては、同6年(1756)6月3日に八戸を発駕して同月18日に江戸到着であり⁽⁹⁾、いずれも15泊16日、つまり16日間の日程であった。

この街道の途中には、藩主が休憩するための御飯屋が設けられていた。但し、江戸に向かう参府の場合、八戸城から奥州街道に面した一戸(現 岩手県一戸町)までが1日の行程に収まるため、他に観音林に御飯屋はあるが、宿泊は行われなかった⁽¹⁰⁾。

また、三浦忠司氏は「八戸藩の伝馬制と参勤交代」のなかで、6代藩主信依と9代藩主信順について、それぞれの治世の間の参勤交代について論じている。

6代藩主信依は、寛保元年(1741)から明和2年(1765)までの治世の間、八戸と江戸の間を10往復、参府と下向は合計20回行っている。旅行日数は15～18日であった。但し、18日の日程となったのは、延享2年(1745)の下向時で、このときは洪水により、2日日程が延びている。

9代藩主信順は、天保13年(1842)から明治4年(1872)の在職の間、八戸・江戸間を9往復半、参府9回、下向10回となっている。旅行日数は17～21日であった。下向の回数が1回多いのは、元治2年(1864)に八戸に下向して以来、江戸に上ることがなかったからである。文久2年(1862)に参勤交代の回数が減らされ、江戸滞在期間が短縮されたが、八戸藩主は沿岸警備・病気のために江戸に赴かなかったことによるものである⁽¹¹⁾。



写真1 八戸市新荒町 惣門跡 上り街道の起点の現状



写真2 八戸市是川字小峠の一里塚の現状



写真3 八戸市南郷大字頃巻沢の一里塚の現状



写真4 八戸市南郷大字市野沢の一里塚の現状



写真5 八戸市南郷大字大森の一里塚の現状

5. 他の地域の大名との旅行日数の比較

現在の青森県域を通過する他藩と比較してみることにする。弘前藩の場合は、資料によって違うが、弘前城から江戸本所二ツ目上屋敷は、およそ182里から186.2里である。参勤交代の日程は、18日間あるいは19日間なので⁽¹²⁾、1日あたりの旅行距離は、9.58～10.34里と程度となる。

松前家の場合は、元禄5年(1692)松前矩広の下向の行程のうち、江戸・青森間約190里だけを見ると、19日間なので、ほぼ1日あたり平均10里である⁽¹³⁾。

したがって、この周辺の大名に関しては、1日10里程度の旅行距離が標準的とみて良いだろう。もっとも、藩主の病気や交通の支障などで、日程が延引したり、あるいは他の事情で急がなければならないこともあるの

で、年によってばらつきがあることは予想される。

他の地域の大名の事例を参照すると、さらにばらつきがあり、1日8里程度から11～12里程度となる場合もあった⁽¹⁴⁾。なお、1里(約3.9km)はおおよそ1時間の道のりであるので、8里なら8時間、12里なら12時間程度歩くこととなる。このころの旅人は、夕方は暗くなる前に宿に入るのが通常であったので、仮に1日12里歩いて暮れ六ツ時(午後6時頃)に到着しようとするれば、途中の休憩・昼食等も勘案すると、朝は七ツ時(午前4時頃)に出立しなければならず、余裕のない日程であったことは想像できる。

6. 盛岡藩領内について

盛岡藩領内の動きについては、中野渡一耕氏が「参勤交代途中の八戸藩主への対応記録」のなかで、八戸藩士遠山家文書の「盛岡花巻鬼柳三ヶ所二而勤方拔書」を紹介し、参勤交代の途中、盛岡藩領の鬼柳(現 岩手県北上市)・花巻(同花巻市)・盛岡の三ヶ所で藩主一行に対する馳走(食事のもてなし等を含む、様々な対応)があったとしている⁽¹⁵⁾。

7. 「御発駕前相定候御用覚」について

『新編 八戸市史 近世資料編 I』で、「御発駕前相定候御用覚」⁽¹⁶⁾が取り上げられている。これは、参勤交代出発前に定めた指示事項等の覚え書きであり、以下の4つの部分から成る構成となっている。

- ・「御発駕前相定候御用覚」……(a)
- ・「御道中相定候御用覚」……(b)
- ・(無題、「八戸」という見出しから始まる部分)……(c)
- ・「寛政十一年未六月御下向之節御道中定式并不時被下目録之覚」……(d)

(a)の部分では、出発前に準備すべき事項が並んでいる。その内容は次のとおりである。雨天の際、雨水でぬれて破れないよう、提灯類に「洪せん(煎)張」、つまり、柿渋に糊を混ぜたものを塗っておくこととされている。天保6年(1835)7月の下向の際に雨で提灯が痛んでしまったことを教訓に書かれたものと考えられる。行列の御供での臨時の雇人については、御徒目付から江戸あるいは盛岡の雇頭に依頼することが定められている。但し、下向の際は江戸、参勤の際は盛岡で雇うよう定められている様子である。出発の日取りが発表されたら、「御配賦」という、必要な数の人馬等を調達するための文書を道中目付が夕方前に各宿場に送ることも定められている。道中の宿場で使用する宿札については、祐筆が「一、御宿者札祐筆為認候事」と、盛岡藩領以外の分を合計24枚書いておくこととしている。宿札は、この場合大名の名を書いた札で、参勤交代等で移動する際、宿場の入口や制札場に掲げられるものである。途中の鍋掛・佐久山の本陣の財政が厳しいので、立ち寄ってほしい旨の依頼を受けたこともこの項目に含まれている。

(b)の部分では、前半で御昼・御休泊の際の御供の一般的な動きや指示について触れている。次いで、道中の主要な地点における様々な御用について触れている。

(c)の部分は、八戸城内から上り街道の観音林までの御用について触れているが、続けて「市戸(一戸)」から、江戸のすぐ手前の宿場である千住までの藩主とその御供の行動、および、そこで彼らに御機嫌伺等で会いにくる使者や役人等について記している。このなかには、札などのあいさつの仕方のほか、食事・宿泊についても詳細に述べられている。

(d)の部分は、各宿場や渡し場等で現地の者たちに支給した金銭の額と渡す相手について、目録の形式で詳細に記されている。

おわりに

八戸藩は寛文4年(1664)の成立以来、幕末まで参勤交代を継続した。藩主が主に利用したのは、八戸城下を起点に二戸で奥州街道に合流する「上り街道(八戸街道)」である。この道は藩の成立以前から存在したが、藩主の往来に伴い松並木の整備や一里塚の管理が徹底された。街道の維持や道普請、伝馬役は領民にとって大きな負担であった。

江戸までの行程は約169里(約660km)で、所要日数はおおよそ17~18日間であった。1日あたり約10里(約39km)を歩く計算となり、早朝に出発して日暮れ前に宿に入る強行軍となる可能性は高かった。これは弘前藩や松前藩などの近隣大名と同程度の標準的な速度である。史料からは、旅程における休憩・宿泊の作法、食事、各地での進物目録などが詳細に定められていたことが分かっており、他藩と同様、参勤交代中の儀礼について詳細な記録をとり、それをもとに、厳格に運用されていた実態がうかがわれる。

(註)

- (1) 八戸市史編纂委員会 編『新編 八戸市史 通史編Ⅱ 近世』2013年 八戸市 20~21頁
- (2) 前掲書 98頁
- (3) 以上、青森県立郷土館 編『青森県「歴史の道」調査報告書 上り街道(八戸街道)』1985年 青森県教育委員会 1頁。
以下、書名を『上り街道』と略す。
- (4) 『上り街道』1頁
- (5) 『上り街道』1頁
- (6) 『上り街道』1・3頁
- (7) 『上り街道』4頁
- (8) 『上り街道』3頁
- (9) 南郷村史編纂委員会『南郷村史』1971年 南郷村教育委員会 355~356頁
- (10) 『上り街道』6頁
- (11) 三浦 忠司 「八戸藩の伝馬制と参勤交代」(八戸歴史研究会『八戸地域史』第58号 2021年)
- (12) 弘前大学国史研究会 編『津軽史事典』1977年 名著出版 213~218頁、および太田原慶子・佐藤良宣・滝本敦・本田伸「資料紹介『奥州通道中記』」(『青森県立郷土館研究紀要第46号』 2022年 157頁の「山形」の項目にある里程を参照した。
- (13) 福島町史編集室 編『福島町史 通説編第2巻』1995年 福島町 85~89頁、278~280頁
- (14) 谷釜尋徳『歩く江戸の旅人たち』2020年 晃洋書房 13頁。これによると、伊勢参りの旅人の平均歩行距離は34.9kmくらいとのことである。これは、約8.9里にあたる。
- (15) 中野渡一耕 「参勤交代途中の八戸藩主への対応記録~資料紹介『盛岡花巻鬼柳三ヶ所ニ勤方拔書』」(八戸歴史研究会『八戸地域史』第59号 2022年)
- (16) 八戸市史編纂委員会 編『新編 八戸市史 近世資料編Ⅰ』2007年 八戸市 439~451頁

(参考文献)

- 青森県立郷土館 編『青森県「歴史の道」調査報告書 上り街道(八戸街道)』1985年 青森県教育委員会
- 三浦 忠司 「八戸藩の陸上交通」[八戸通運株式会社社史編纂委員会 編(同社社史)『地域の発展とともに』1994年]
- 三浦 忠司 「八戸藩の伝馬制と参勤交代」(八戸歴史研究会『八戸地域史』第58号 2021年)
- 中野渡一耕 「参勤交代途中の八戸藩主への対応記録~資料紹介『盛岡花巻鬼柳三ヶ所ニ勤方拔書』」(八戸歴史研究会『八戸地域史』第59号 2022年)
- 八戸市史編纂委員会 編『新編 八戸市史 通史編Ⅱ 近世』2013年 八戸市
- 八戸市史編纂委員会 編『新編 八戸市史 近世資料編Ⅰ』2007年 八戸市